

6. 熊阪 台州

(1739.4.23-1803.3.21)

名は定邦または邦^{ほう}。字は子彦^{あざな しげん}。通称は初め宇右衛門のちに璜^{たまさ}、号を台州という。上保原村高子生まれの漢詩人である。

元文4年豪農の家に生まれた。父の定昭(霸陵)は、江戸後期に保原を中心に漢詩文の文学活動を繰り広げ、自らの屋敷を「白雲館」と号した人である。

宝暦10年、台州は、22歳の年に、父の影響を受けて江戸に出、入江南溟に師事した。翌年、江戸から上方へ約3か月間の旅に出て見聞を広めた。その際の記録が『西遊紀行』^{*1}である。南溟の死後は松崎観海^{*2}に師事し、広く文人・学者と交流した。

主な著作に『信達歌』^{*3}『魚籃先生春遊記』『文章緒論』^{*4}そして、台州の思想が納められたという『道術要論』^{*5}などがある。

安永年間末、台州40歳の頃、病の床に見舞^{けんい}いにきた弟子小野君 翔・高木忠 卿・高木元彝の三人それぞれに一話ずつ物語を語らせた。さらに、文章修練のためにとそれを漢文訳させた。これに台州の推敲を加えたものが『三子紀事』であり、台州自身が漢文訳を施し、「模範解答」として取りまとめたものが『含錫紀事』(子どものお話)である。「二翁事」(花咲翁)「蟹猿事」(猿蟹合戦)「桃奴事」(桃太郎)の三話が納められている。寛政4年に出版され、台州が主宰する正心塾の入門テキストとしても用いられた。出版の際の広告^{*6}には「昔しはなしを漢文に面白く綴りたる書なり。尤訳文の手本にもなるへき一本なり」と記されている。なお、同じ頃に出版された中井履軒の『昔昔春秋』の中にも「桃太郎」の漢文訳が収められている。

江戸時代中期から、庶民の間では「草双紙」と呼ばれる絵入本が流行していた。中でも婦女子向きで絵の多いものが「赤本」と呼ばれ、桃太郎はこの「赤本」を活躍の場としていた。

この頃の桃太郎は、桃から生まれる「果生

型」ではなく、桃を食べて若返った爺と婆から生まれてくる「回春型」であった。また、鬼は悪者だから退治するのが当然と、道徳的な説明なしに鬼ヶ島へ向かう。退治した鬼から略奪した宝物は打出の小槌・隠蓑・隠笠と金銀・反物などだが、宝物をお供の犬・猿・雉に分け与えたという例は古い話ほど少ない。

台州の「桃奴事」の特徴は、この「桃太郎」の筋立てはそのままに、道教的思想を色濃く出している点にある。

一夜同夢有一道士。羽衣褊袴。立乎中庭。而告之日。我俾汝眉壽。且賜汝佳兒。因授以一小筐。日後十二年。児厄鬼國。此中有物。可以屈賊。[丈人と媪が跡取りの居ないことを憂うと]、二人の夢の中に羽衣をひらひらとさせて一道士が現れ、「二人を長生きさせ、佳き児を授ける。その児が一二年後鬼ヶ島で困ったときに使うように」と告げ、小筐を授ける。

忽見有一道士。乘扁舟而至。因揖桃奴日。汝乘此。鬼國可至矣。言訖不見。

[桃太郎と犬・猿・雉が海岸に着くと]舟に乗った道士が現れ、「この舟に乗れば鬼の國に着く」と言って姿を消す。

桃太郎たちが鬼ヶ島から舟で逃げようとすると、鬼が海水を吸い、舟が動かなくなる。その時、道士がくれた小筐を開けてみると朱塗りの匙が入っていて、それで自分の尻をたたいて鬼を笑わせ海水を吐き出させた。

等、靈妙な力を体得した仙人などがイメージされる「道士」が要所に登場する。そして、桃太郎の持ち帰った宝は、その子孫が遊びほうけたために、消え失せてしまう、という結末である。

天明3年からの洪水や冷害による大凶作が元で大飢饉が発生した。この時期を境に台州には思想上の変化が見られ、文学運動を停止して救貧事業に力を尽くすことになる。

*1 当館所蔵は『西遊紀行 上・中・下編』江戸 前川六左衛門 1771 L919.5-K1-6

*2 松崎観海 (1725.5.4 ~ 1775.12.23) 丹波篠山藩の儒学者・漢詩人。

*3 当館所蔵は、『信達歌』江戸 藻雅堂 1787 L919.5-K1-3

*4 当館所蔵は、『文章緒論』名古屋 風月孫助 1801 L919.5-K1-4

*5 当館所蔵は、『熊阪台州著「道術要論」翻刻と解説 1. 2』高橋章則：著 東北文化研究室紀要通巻第 39 集別刷 1998 L121.6-K1-1

*6 『昔昔春秋・含錫紀事』の解説(高橋昌彦：解説)に「青藜閣蔵版書目録」に記されている」との記述。

【作品介绍】

- ◆『含錫紀事』須原屋伊八 1792 LA919.5-K1-1
- ◇「含錫紀事」『万物滑稽合戦記』石井研堂
：編校訂 博文館 1901
- ◆『含錫紀事』明倫堂書店 1940
- ◆『昔昔春秋・含錫紀事』太平社 1998
LA919.5-K-2

【参考文献】

- ◆『曳尾堂皇朝籍目録 1,2』曳尾堂 1912
(自館複製本)
- ◆『曳尾堂漢籍目録 1,2』曳尾堂 1912
(自館複製本)
- ◆『福島県史 21,22』福島県 1967,72
- ◇「豪農地主の経済と思想の二形態」庄司吉之助
『東北経済 No.55・56』福島大学東北
経済研究所 1974
- ◇「近世儒学と熊坂台州の思想」庄司吉之助
『福島史学研究 通卷 25号』1975
- ◇「熊坂台州の政治と儒者批判」庄司吉之助
『福島史学研究 通卷 26号』1975
- ◆『日本昔話事典』弘文堂 1977
- ◇「白雲館二十境雜記」菅野宏 『芸文福島
創刊号』福島県芸術文化団体連合会 1980
- ◆『桃太郎像の変容』滑川道夫：著 東京書
籍 1981
- ◇「白雲館のひとびと [正]・続」菅野宏
『芸文福島 第 2,4号』 福島県芸術文化
団体連合会 1981,83
- ◆『日本古典文学大辞典』岩波書店 1984
- ◆『保原町史 第 1,5 卷』保原町 1985,87
- ◆『白雲館墓碣銘』菅野宏：編著 白雲館研
究会 1989
- ◆『福島市史 別卷 7』福島市史編纂委員会
：編 岩瀬書店 1989
- ◇「桃太郎」小野美花 『言文 39』福島大
学国語学国文学会 1991
- ◇「江戸期漢文戯作『含錫紀事』の「紀桃奴
事」について」内ヶ崎有里子 『学芸国語
国文学 26』東京学芸大学国語国文学会
1994
- ◆『国書人名辞典』岩波書店 1995
- ◆『新編雅三俗四』石井研堂：著 青裳堂書
店 1997

【略年譜】

西暦	和暦	年齢	関係事項
1739	元文4	1	4.23伊達郡高子の豪農の下に生まれる。父・定昭、母・養都。
1743	寛保3	5	母・養都が亡くなり、祖母・越に育てられる。
1755	宝暦5	17	祖母・越が亡くなる。
1760	宝暦10	22	父の薦めにより江戸に出、入江南溟に師事する。
1761	宝暦11	23	江戸から上方への旅をする。
1764	明和1	26	父・霸陵56歳で亡くなる。
1765	明和2	27	松崎観海に師事。寺島氏葛と結婚。
1767	明和4	29	長男・定秀(盤谷)誕生。
1768	明和5	30	妻・葛25歳で死去。
1771	明和8	33	『西遊紀行』出版。
1775	安永4	37	江戸に上り、師松崎観海に面会する。
1781	天明1	43	『魚籃先生春遊記』出版。
1783	天明3	45	『観海先生集』を出版。洪水・冷害などによる凶作で、大飢饉が発生、文学運動を停止して救貧事業に力をつくす。
1787	天明7	49	『信達歌』出版。
1792	寛政4	54	『含錫紀事』出版。
1801	享和1	63	『文章緒論』出版。病床にあり、『道術要論』の論著を始める。
1803	享和3	65	『道術要論』完成。3.21死去。